

RETAILER ACADEMY NEWS

Aug 2021 | Bentley Motors Japan



グローバルの上半期販売台数は過去最高を記録 日本は過去2番目の好調

ベントレー モーターズによると、グローバルの2021年上半期の販売台数は、新型コロナウイルスの感染拡大前の2019年同期比で50%増の7,199台となり、過去最高を記録しました。販売台数の内訳は、ベントレイガが2,767台、コンチネンタルGTが2,318台、フライングスパーが2,063台と、3車種がほぼ均等でした。営業利益もこれまでの通年決算の最高記録を上回る178,000,000ユーロ（約228億円）を達成しました。

アジア太平洋地域においても好調な業績で、販売台数は41%増の778台を記録。特にフライングスパーはV8モデル投入の効果が大きく、360%増の253台と驚異的に販売台数を伸ばしました。

そしてベントレーの日本での2021年上半期は、29%増の283台でした。これは2006年の299台に次いで2番目の記録となりました。ちなみに、6月単月では83台を記録。こちらも2018年10月の97台に次ぐ2番目の記録となっています。上半期の車種別台数は、ベン

ティガが116台、コンチネンタルGT（コンバーチブル含む）が97台、フライングスパーが70台で、グローバルと同様に3車種で大きな差がなく、いずれのモデルも人気であることがわかっています。

アジア太平洋地域のリージョナルディレクターを務めるニコ・クールマンは、「アジア太平洋地域での好調な業績は、それぞれの地域の強力な正規販売店ネットワークと魅力的なモデルが揃った証です。半期決算の成功を祝う一方で、世界の一部地域で深刻化しているパンデミックや、アジア太平洋地域でもパンデミックが発生していることなど、年末に向けて大きなリスクがあるため、通期の見通しは楽観視しつつも慎重に捉えています」などとコメントしています。このコメントにあるとおり、日本でもまだまだ予断を許さない状況ではありますが、リテーラーの皆様のご協力をいただきながら、さらに販売台数を伸ばせるよう、ベントレー モーターズ ジャパンとしてもできる限りのバックアップをして参ります。



■ 日本における2021年上半期（1～6月）新規登録台数

ベントレイガ	V8	115
	Speed	1
	小計	116
コンチネンタルGT	V8	50
	W12	22
	V8 コンバーチブル	12
	W12 コンバーチブル	13
	小計	97
フライングスパー	V8	10
	W12	60
	小計	70
合計		283

※出典：ベントレー モーターズ ジャパン



COMPETITOR INFORMATION



至高の室内空間を備えた最高級SUV メルセデス・マイバッハ GLS 600 4MATIC

メルセデス・ベンツ日本は、メルセデス・マイバッハブランドのフラッグシップSUVとなるメルセデス・マイバッハ GLS 600 4MATICを2021年7月1日に発表しました。

SUMMARY

- 最高級SUVのGLSをベースに、メルセデス・マイバッハ Sクラスと同等の高級感と快適性を実現
- GLSの3列・7人乗りを2列・4人乗りにしたことで得られる後席の圧倒的な居住性と快適性
- セダンよりヘッドクリアランスに余裕のある室内空間によりショーファードリブンとしての用途に対応
- 乗降時に自動で展開・格納されるアルミニウム製の電動ランニングボードを標準装備
- 後席左右のエグゼクティブシートは、メルセデス・マイバッハ Sクラスと同様にバックレスト角度が最大43.5度までリクライニング可能



INTERIOR

- 内装は、5種類のウッドインテリアトリムと3種類のインテリアカラーから選択可能
- 後席の位置をGLSに比べて120mm後方に、30mm内側に移動させることで、さらなる余裕を生み出したレッグスペース
- ステアリング、ダッシュボードに加え、ルーフライナーにもナッパレザーを使用
- 後席の後方にはパーセルシェルフ付の固定式パーティションを設置し、居住スペースとラゲッジスペースを分離
- 左右後席の間には、専用シャンパングラスの収納部と750ccのワインボトル3本が入る大型クーリングボックスを装備
- MBUX リアエンターテインメントシステムのモニターを後席左右に配置。リアアームレスト前方のリアタブレットでも操作可能



EXTERIOR

- マイバッハとしての存在感を高めるクローム基調の専用エクステリアを採用
- フロントはハイグロスクロームの専用グリルとメッシュのエアインテーク、アンダーカバーの採用により、GLSからの差別化を強調
- 縦基調の専用フロントグリルと、SUVでは唯一となるスリーポイントドスターのフードマスコットを装備
- サイドウィンドウのクロームピラーとリアピラーにマイバッハエンブレムを装備
- ポリッシュ仕上げのマルチスポークデザインとなるアルミホイールはメルセデス乗用車では最大となる23インチ
- マイバッハならではの個性を主張するツートーンボディカラーを設定



TECHNOLOGY

- 4.0L V型8気筒ツインターボエンジンは、48V電気システム+ISG（インテグレートッド・スターター・ジェネレーター）の組み合わせにより、力強さと高効率を両立
- 専用チューニングにより、GLS 580 4MATICに比べて69ps、30Nm高い最高出力558ps、最大トルク730Nmを発揮
- エアサスペンションをベースに48V対応のアクチュエーターを各輪に追加。スプリングレートとダンパーの減衰力を個別に制御できるE-ACTIVE BODY CONTROLを標準装備
- 走行モードには、新たに後席の乗り心地に焦点を絞った制御を行う「マイバッハ」モードを設定



PRICE

メルセデス・マイバッハ GLS 600 4MATIC: 27,290,000円(税込)

BRAND STORY

Mercedes-Benz SUV



メルセデス・ベンツブランドのSUVモデルの頂点に立つGLS

アメリカ製のMクラスがルーツ

現在数多くのSUVラインアップを用意しているメルセデス・ベンツ。そのルーツとなるモデルは、1997年に発表されたメルセデス・ベンツMクラスです。

現在のGLEにあたるMクラスは、ドイツ本国での生産ではなく、新たにアメリカ・アラバマ州に建設した工場で生産されました。そのきっかけは、アメリカで発生したSUVブーム。当時はピックアップトラックをベースにしたモデルが主流で、初代Mクラスもラダーフレームを備えていました。

ちなみ1997年はプレミアムSUV元年ともいえるもので、同年にはリンカーン・ナビゲーター、トヨタ・ハリアー（レクサス RX）が誕生。その後、2000年にBMW X5、2002年にはボルシェ・カイエンが登場し、プレミアムSUVが世界的な人気モデルになりました。



1997年登場のMクラスはメルセデスがSUVとして開発した最初のモデル

クロカンモデルのGクラスもSUVに

ここでひとつ疑問が生まれます。「GクラスのほうがMクラスより前に存在しているのではないか?」と。確かに当初「ゲレンデヴァーゲン」と呼ばれていたGクラスは、1979年に誕生しています。ただ、ゲレ

ンデヴァーゲン（460型）はもともと軍用車を民生用に仕立てた、パートタイム4WDの無骨なクロスカントリーモデルでした。そのため、当時4輪駆動が必要だった富裕層は「砂漠のロールス・ロイス」と呼ばれたレンジローバーに乗っていました。

そんなGクラスに変化が訪れたのが、1989年に登場した463型のゲレンデヴァーゲン。新たにフルタイム4WDを備え、内装も豪華になったことで、富裕層に注目されるモデルとなりました。特に2000年代に入ってから改良のたびに安全装備と快適装備が充実していくかたちとなり、いつしかSUVカテゴリーに組み込まれていったのです。



Gクラス高級化路線のルーツは、5.0L V8エンジンを初めて搭載した1993年の500 GE

GLAからメルセデス・マイバッハまでフルラインアップ

メルセデス・ベンツのSUVモデルは、エントリーモデルのGLAからGLC、GLE、フラッグシップのGLSまでフルラインアップを構成し、GLCとGLEにはクーペモデルも設定。EVではEQAとEQC、そしてメルセデス・マイバッハブランドのGLSも用意しています。

同社は2025年以降の新型車についてはEVのみとすることを発表しているため、10年以内に同社のSUVがすべてEVに切り替わることが予想されます。



同社初の量産EVモデルはSUVのEQC。2025年以降に発表される新型SUVはすべてEVになる予定

LIMITED EDITION

フライングスパー ハイブリッド
オデシアン エディション登場

ベントレー モーターズはこのほど、フライングスパー ハイブリッドの導入を記念した限定車「フライングスパー ハイブリッド オデシアン エディション」を発表しました。この限定車は、2035年のラグジュアリーモビリティについてベントレーの考え方を示したコンセプトカー「EXP 100 GT」からインスピレーションを得て仕上げられています。また、ベントレーの中長期経営計画「Beyond 100」戦略の一環として、サステナビリティに配慮した新素材導入の第一歩にもなっています。

日本でのメーカー希望小売価格は30,800,000円（消費税込み）で、すでに受注を開始しています。



特別装備

- ・オープンポア コア ウッドパネル（フェイス&ウエストレール）
- ・100%英国産ウールを使用したツイードのパネル
- ・オータム、リネンと合わせるレザーカラーは5色（ペルーガ、ボーボイズ、クリケットボール、ブリューネル、パートオーク）から選択可
- ・糸の色をグラデーションにして際立たせたロフトダイヤモンドパターン



- ・アクセントカラー「オータム」を加えた専用カラースプリット
- ・オデシアン エディション専用トレッドプレート
- ・パールブロッガー アクセントの21インチ10ツインスポークアロイホイール
- ・パールブロッガー アクセントの車両下部のブライトウェア（前後バンパー、ヘッドランプ&テールランプ サラウンド、ボディーサイド下部）



その他の標準装備

- ・ツーリング スペシフィケーション
- ・電動展開/格納式イルミネーション付きFlying B ボンネットマスコット
- ・LEDウェルカムランプ（全ドアに装備、ベントレー ウイングを地面に投影）
- ・レザーヘッドライナー
- ・3D ダイヤモンドレザー
- ・ローテーション ディスプレイ
- ・インテリア ムードライティング





4ドア グランドツアラーの頂点 フライングスパー マリナー登場

ベントレー モーターズはこのほど、フライングスパー マリナーを発表しました。究極の4ドア ラグジュアリー グランドツアラーで、ハイブリッド、V8、W12のいずれにも対応しています。したがって、マリナーが手掛ける初の電動ベントレーということにもなります。これまでで最もラグジュアリーなフライングスパーは、もちろん英国クルーで設計、エンジニアリング、手作業で製造されています。ベントレーのフラッグシップモデルとしての地位を確立したフライングスパー マリナーは、エレガントなディテールを重視するお客様にアピールできるモデルです。メーカー希望小売価格（いずれも消費税込み）は、V8モデルとハイブリッドモデルが33,500,000円、W12モデルが36,500,000円で、日本でのデリバリーは2022年第2四半期を予定しています。

SUMMARY

フライングスパー マリナーの
サマリー

- 「世界最高の車」をさらに発展させたモデルで、ハイブリッド、V8、W12のすべてで対応
- 精巧に作り込まれたセダンは、現代のクラフトマンシップと息を飲むようなラグジュアリーの究極の表現
- 世界最古のコーチビルダーで、現在はベントレーのビスポーク部門であるマリナーが担当
- ダブルダイヤモンド フロントグリル、専用デザイン22インチホイールなどが採用されたユニークなエクステリア
- 手作業で仕上げられるインテリアは、3色のカラースプリット、ダイヤモンドミル仕上げのセンターコンソールといった美しいディテールが特徴



EXTERIOR

エクステリアの特徴

- ダブルダイヤモンド フロントグリルおよび「MULLINER」ロゴ入りフェンダーベント
- クローム ロワーバンパー グリル
- サテンシルバー ドアミラーカバー
- 専用デザイン22インチホイール（グレーペイント&ポリッシュ、セルフレベリングパッド付き）
- 電動展開/格納式フライングBマスコット
- ジュエル フューエル&オイル フィラーキャップ



INTERIOR

インテリアの特徴

- 助手席側フェイスパネルに車両シルエットとMULLINERロゴ
- イルミネーテッド トレッドプレート（MULLINERロゴ）
- マリナー ドライビング スペシフィケーション標準装備
- マリナーグラフィックのインストルメントパネル
- 電動展開/格納式ピクニックテーブル（マリナー専用デザイン）
- レザー製キーケース

- 3色の専用カラースプリットで8種類の組み合わせを用意
- ダイヤモンドミル仕上げのフロント&リア センターコンソール
- ブラッシュド シルバー マリナー クロック



19年にわたるブライトリングとの パートナーシップに幕



ベントレー モーターズはこのほど、2021年末でブライトリングとのパートナーシップを解消すると発表しました。ブライトリングとは2002年のパートナーシップ締結以来、19年という長期間をともに歩んできました。これは、ラグジュアリーカーメーカーと高級時計メーカーのパートナーシップとしては史上最長の記録です。

ブライトリング製の時計が採用されたのは、2003年にデビューした初代コンチネンタルGTの車載クロックが最初でした。その後もコラボレーションは続き、ベンティガの車載クロックのオプションとして開発されたトゥールビヨンや、コンチネンタルGT Speed ブライトリング ジェットチーム シリーズ、プレミアB01クロノグラフ42 ベントレー プリティッシュ レーシング グリーンなどの「ブライトリング for ベントレー」などがありました。今年4月には、プレミア B21 クロノグラフ トゥールビヨン42 ベントレー リミテッド・エディションが発売され、この最後の1点が完成し、新たなオーナーのもとに届けられます。

ベントレー モーターズのエイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「志を同じくする2つのブランドが協力することで、互いのパフォーマンスを向上させることができるということを示しました。この20年は本当に楽しい思い出であり、ブライトリングの輝かしい未来を祈念します」などとコメント。ブライトリングのジョージ・カーンCEOも「この19年間で成し遂げたことを誇りに思っており、ブライトリングとベントレーの新たな旅が始まります。出荷される最後のトゥールビヨンは、両者が互いに良い影響を与えあった年月を体現しています」などと話しています。

マリナーがベンティガ用の22インチ カーボンファイバーホイールを開発

ベントレー モーターズのビスポーク部門であるマリナーはこのほど、ベンティガ用の22インチカーボンファイバーホイールを発表しました。ブッチコンボジット社と共同開発したこのホイールは、世界中で生産されているカーボンファイバーホイールとしては最大となる予定。ホイール1本あたりのバネ下重量は6kg改善されるほか、さまざまなメリットが生じます。

新開発のカーボンファイバーホイールは、TÜV (Technischer Überwachungsverein : 技術検査協会) の厳しい基準を満たしており、TÜVの全テストをパスした史上初のカーボンファイバーホイールとなりました。TÜVの要求事項の中で最も厳しい検査の1つである衝撃テストでは、性能面でのメリットに加え、カーボンリムの安全性の高さが証明されました。アルミホイールの場合は、ホイールに亀裂が入ったり砕けたりするような激しい衝撃を受けると、タイヤは破裂するように損傷しますが、カーボンファイバー製のリムは、カーボンファイバーをインテリジェントに織り込んで作られているため、タイヤをゆっくりと収縮させることができることから、緊急時でも車両をコントロールしながら安全に停止させることができるのです。

こういった安全性の向上に加え、軽量化とカーボンファイバーの高い剛性によるステアリングの敏捷性の向上、バネ下重量の軽減によるブレーキ性能と応答性の向上、タイヤ摩耗の低減といったメリットも得られます。

さらにデザイン面でも、エクステリアにカーボンファイバー製のパーツが追加されるスタイリング スペシフィケーションや、インテリアのハイグロスカーボンファイバー パネルを補完する存在として期待できます。この新しいホイールは、2021年後半から受注が可能となる予定です。



マリナーのビスポーク事例が 1000件を突破



ベントレー モーターズによると、2014年に設立されたマリナーのデザインチームが手掛けたビスポークおよびパーソナライゼーションの事例が1000件を超えました。1000例目の車両はヨーロッパのお客様からの注文で、インテリアに2つの特別なご要望をいただきました。1つはベンティガのインテリアにミュルザンヌの歴史を感じさせるオリーブアッシュのウッドパネルを使用すること。もう1つは、インテリアのコントラストをより強調するように、シートとドアトリム上部のレザーにツイinstッチを施すことでした。

7年前にマリナーのこのチームが初めて手掛けたプロジェクトは、15台限定で製造したフライングスパー セレニティでした。乗員の乗り心地にフォーカスし、シートとヘッドレストを一から作り直し、新しくユニークなダイヤモンドキルティングをキャビン全体に施すなど、特別感を演出してさまざまなデザイン変更を行いました。この独特のレザーのデザインは、現行モデルのコンチネンタルGT マリナーにも活かされています。

チームが手掛けてきた1000件は、トレッドプレートのパーソナライズから、バカラルのように完全なコーチビルド、国内外からの依頼や限定モデル、レースカーのデザインまで、多岐にわたっています。

マリナーとモータースポーツ部門の責任者であるポール・ウィリアムズは、「2014年以来、マリナーデザインチームは、週に平均3件の依頼を受けています。すべてのデザインに共通しているのは、個々のお客様のためのものであるという点であり、どれも唯一無二のものです」などとコメントしています。

各分野の「プロ」が語るベントレー 钣金職人：菅野敬一氏

ベントレー モーターズ ジャパンのウェブサイトでは現在、各分野の「プロ」の目にベントレーがどのように映っているのかをお聞きしたインタビューを掲載しています。今回は、精密钣金加工工場「菅野製作所」の三代目で、完全ハンドメイドのオリジナルプロダクト「AERO CONCEPT」を展開する職人の菅野敬一氏の記事を簡潔にご紹介します。

コンピュータ制御により各種工作機械の精度が高まっている今、あえて人の手でモノを作ることに、果たして意味と価値はあるのだろうか？ そんな問いかけで始まるこの記事のテーマは、ずばり「ハンドメイド」。聞き手のそんな問いかけに対し、菅野氏は「ハンドメイドの何が優れているか、と聞く前提自体がちよっと違うのではないかと」語ります。「自動化されていても、誰かがその工作機械を設計して、それを使うと決めている。AERO CONCEPTにしても、当然ですがさまざまな工作機械も使っています」と続ける菅野氏は、重要なのは道具ではなく、何を優先し、そのかわりに何を捨てるかという“哲学”だと語ります。

かつて下請け業者として重宝されたこともあったが、時代の流れに翻弄されて倒産。菅野氏はそれ以降、「自分が本当に好きなもの、自分が使いたいと思うもの以外は絶対に作らない」と決めて立ち上げたのがAERO CONCEPTだったそうです。当然機械任せにはできず、最後の1000分の1ミリの調整においては「私の“手”のほうが上。なぜならわたしが『そうしたい！そうじゃなきゃ嫌だ！』と思っているから」と、ものづくりへのこだわりを語る菅野氏。「本質的にはわたしの心、つまりは価値観と哲学こそが、AERO CONCEPTの本当の意味での“製造担当者”だと言えるでしょうね」

そんな菅野氏は、コンチネンタルGT V8を見て「誰かの意思」を強く感じると話します。钣金加工の専門家が見ると、「“効率”とか“儲かること”を最大の価値としている集団には、このダッシュパネルは絶対に作れない」そうです。菅野氏の思いは、ぜひリンクの先で全文をご覧ください。



内装マテリアルのトレンド

クルマのインテリアには、レザーをはじめ、プラスチック、ウッド、金属など、さまざまな素材が使われています。それらの素材をいかに巧みに使い分けるかによってクルマの印象は大きく変化してしまいます。今回は、シート素材を中心に、クルマの内装の素材を紹介します。



内装マテリアルのトレンドは「サステナビリティ」

近年、何をするにも重要視されているのが「サステナビリティ（持続可能性）」です。自動車の世界でも同様で、電動化の動きも、そうした「サステナビリティ」のひとつと言えるでしょう。内装に関して言えば、リサイクル素材のポリエステルなどからできた素材の採用です。アウディやボルボ、MINIなどが一部のモデルに「ダイナミカ（Dinamica）」や「テイラードウールブレンドシート」などを採用しています。また、MINIは8月に、英国のデザイナーであるポール・スミス氏と「持続可能デザイン」をテーマにしたMINIを発表。再生プラスチックを3Dプリンターで成形したパネルや、リサイクルしやすいように、単一素材で作ったシート素材などが使われています。



再利用ポリエステル繊維を主原料とする「ダイナミカ」。耐久性が高く、カラーや見た目も自由自在。旭化成の子会社が生産・販売を行っています。



ボルボが採用した「テイラードウールブレンドシート」は、30%のウールと、70%のリサイクルポリエステルを使った素材を採用しています。



MINIとファッション・デザイナー、ポール・スミス氏のコラボで生まれた「MINI STRIP」。ニットのシートや再生ゴムのマットなど、リサイクルがテーマです。

シート素材の特徴

種類	シート表皮名	特徴	材質
ファブリック（布）	モケット	毛織物の一種で、短い起毛が特徴。摩擦に強く、なめらかな肌触り。	ウール/ポリエステル
	トリコット	伸縮性に優れた縦編の生地。糸の種類によって感触が変わる。	ポリエステル
人工皮革	ダイナミカ	再生ポリエステルが原料。マイクロファイバーでできており、スエードのような肌触り。	再生ポリエステル
	アルカンターラ	スウェード調の高級人工皮革。東レの子会社となるイタリアのアルカンターラ社の登録商標。滑らかな手触りながら、起毛で摩擦力があるため、滑りにくく、しかも耐久性に優れます。	ポリエステル
本革	セミアニリンレザー	皮革の表面のコーティングに使う顔料を、薄く透明なもので仕上げた高級本革。しなやかな手触りで、きめ細やかな表面が特徴です。	牛革
	ナッパレザー	柔らかく耐久性に優れた高級な本革の総称。アメリカのカリフォルニア州ナッパ地区で作られていた革が語源となっています。	



コンチネンタルGTスピード・コンバーチブルの内装には、アルカンターラが使われています。滑りにくいため、ステアリングの操作性を高め、シートのホールド力を高めます。耐久性が高いので、レースシーンでも盛んに使用されています。



フライングスパーハイブリッド限定車 オデシアンエディションのキャビンには、サステナブルな100%英国産のウールを使った美しいツイードパネルが使われています。

巨大化する一方のモニター類

近年のクルマは、コネクテッド機能の進化にあわせ、年々、室内のモニターは大きくなる一方。そうしたニーズに応えるため、コンチネンタルのようなサプライヤーは、モニターの開発を熱心に進めています。最新の技術を使うと、モニターは平面だけでなく、曲面で作ることも可能となっています。また、2Dだけでなく、3Dでの表示も可能になります。将来は、ドライバーの前面にあるパネルがすべてモニターになる可能性もあるのです。



コネクテッド機能の進化やエンターテインメント機能の強化によりモニターは大きくなる一方。2Dだけでなく、3Dでの立体的な表示もできるようになっています。



モニターのディスプレイは平面だけでなく、写真のような曲面にすることも可能となっています。写真はコンチネンタルのデモンストレーションです。